

アイヌ語地名研究

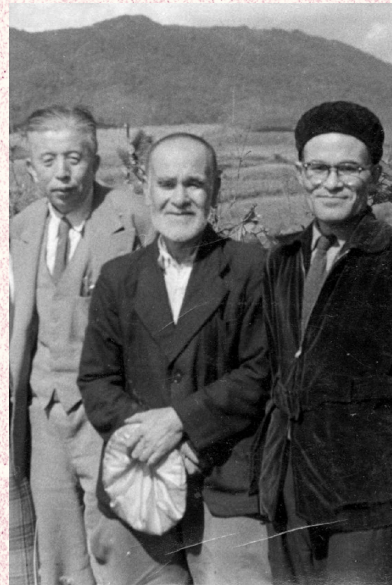
1958（昭和33）年、49歳の時に北海道大学教授になります。

この年に、真志保の地名研究の代表作である『幌別町のアイヌ語地名』を山田秀三と共著で出版します。

この研究では父・高吉が協力しており、真志保は「登別でアイヌ時代の地名を詳しく覚えていたのは、僕のおやじしかないのですよ」と山田に話しています。



▲1957（昭和32）年、48歳。胆振・日高地方でアイヌ歌謡録音指導を行い、HBCラジオで『アイヌ歌謡』が放送されました。中央が真志保。下は放送されなかったテープで、真志保によるイフンケ（子守歌）の解説の声が入っています。



▶1955（昭和30）年、46歳。幌別町のアイヌ語地名調査。右から真志保、案内人である父の高吉、北海道曹達株式会社の社長でありアイヌ語地名研究者である山田秀三。

衰えぬ研究心

しかしながら、月日とともに病状は悪化の一途をたどっていきます。この状況でも、研究への意欲は衰えることがなく、亡くなる直前にはアイヌ音楽収集の委員に就任し、さらに『えぞおばけ列伝』が出版されています。

残念ながら1961（昭和36）年6月9日に心臓病のためこの世を去ります。享年52歳でした。

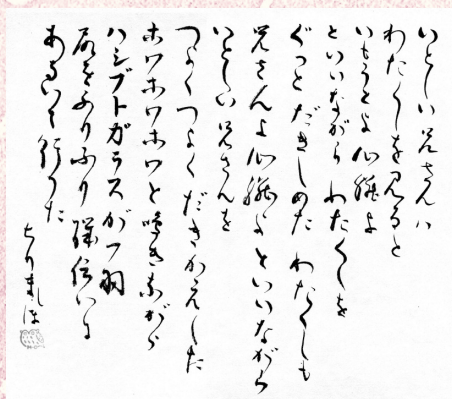


▲『オソルコチ』のスケッチ（左）と実際の風景（右）。白老町虎杖浜にあるアイヌ語地名。『神様が鯨を串焼きにしていた時に焼き串が折れ、ビックリして尻餅をついて』できた地形とされます。右の写真には、神様のお尻の跡を見取することができます。

知里真志保は、アイヌという出自に苦悩しながらも、アイヌ文化の研究を続けてきました。そこにはアイヌに対する偏見との闘いという側面もあります。それゆえに激しい批判を行いました。アイヌ自身や文化を偏見なく正しく伝えたいという強い想いと誇りを持って、アイヌ語研究に捧げた生涯でした。

【主要文の引用と資料貸与協力】

北海道アイヌ協会登別支部、知里真志保を語る会、知里昭彦さん、荒井和子さん、NPO法人知里森舎、藤本英夫1994『知里真志保の生涯』草風館



▶1961（昭和36）年。主治医である南部忠へ送った色紙。2つのカムイユイカラから引用した詩とされます。自分の死期を悟り、研究から去らざるをえない想いを比喩的に書いたと考えられます。